

# T<sup>3</sup> レーザーによる「実験天文学」への挑戦

田 島 俊 樹

〈テキサス大学物理；原研先端基礎センター〉

e-mail:ttt@dino.ph.utexas.edu

卓上テラワット ( $10^{12}$  W) レーザー（略して T<sup>3</sup> レーザー）が 1990 年代になって出現し、従来地上の実験室では実現されると考えられなかつた天文学的物理条件が実験的に作り得るという情況が生まれて來た。白色矮星の内部のような超高压物質とか宇宙初期やブラックホール近傍のプラズマの研究など新局面を紹介する。

## 1. T<sup>3</sup> レーザーとは？

1990 年代になって急速に進歩したレーザー科学技術の結果、卓上型でもテラワット ( $10^{12}$  W) 以上のパワーが出せるレーザーが出現し、これを愛称して T<sup>3</sup> (Table-top terawatt) レーザーと言うようになった。レーザーのピークパワーは、核融合レーザーなどの開発にもかかわらず、1970 年頃より 20 年間に渡って停滞していたが、一つには CPA (共鳴パルス増巾) 法という、大空間に拡げて増巾する従来形に対して大時間に拡げて増巾する方法の発明と、二つには高飽和固体素子（例えばチタンサファイア）の発見開発とを待って、最近革命的進展を見せこの数年で数桁の飛躍が起こっている。

CPA 法によると、レーザーは従来の大レーザーと較べて高エネルギーでないにせよ、レーザーのパルスが著しく極短化する為に以下のような顕著な性能を持つに至る。

- 1) 短パルス性。レーザーパルス長がフェムト秒 ( $10^{-15}$  sec) で測る程度 ( $10^{-14}$  から  $10^{-13}$  秒) に時間的圧縮を受けられる様になり、「超高速光学」の出現を見るに至っている。この時間は原子的（或いは量子的）時間、即ち電子が原子を徘徊する時間の程度である。
- 2) 超大強度。レーザーエネルギーはさほどでないが、上記のパルス長が極端に短いので、パ

ワーがテラワットを軽く越え最近ではペタ ( $10^{15}$ ) ワットに肉薄している。又集光性も良いのでレーザー強度は著しく  $10^{18}$  から  $10^{23}$  W/cm<sup>2</sup> が可能である。この強度に対応する光の電場は  $10^{11}$  から  $10^{13}$  V/cm の程度で、原子内電場をはるかに凌ぐようになる。

- 3) 広帯域。レーザーパルスが短い為にスペクトルの巾が極めて広く可視領域を広くまたぐ事も可能で色々の相互作用に使える。
- 4) 小型で安価。空間拡張増巾を行わない原理の為に増巾素子が小型で従って安価になり、卓上型で上記の著しい性能が可能になり、一研究室単位の実験も可能にしている。
- 5) 高繰返し。小型素子なので増巾に伴う冷却が容易で、数時間に一発といった大レーザー操作と比し、一秒に数十～千発といった頻度の操作が可能であり、精密実験にも向く。

T<sup>3</sup> レーザーは、以上の五大性能のどれか一つが達成されていると言うのではなく、全五性能が同時に実現されている点が大切である。上に略記した様に、いくつかの物理量において数桁の飛躍を見せるレーザーが、新しい領域の物理、極限物性の世界を大きく押し広げる事は明白である。五大性能に依拠した様々な魅惑あふれ胸おどるような応用が多々あるが、幸い、最近世界に先駆け日本で宅間教授を座長とした「光量子懇談会」の報告

書<sup>1)</sup>が広く深くサーベイしているので詳細は委ね、ここでは高強度にまつわる天文向きの極限物性に焦点を当てよう。

$T^3$  レーザーの超高強度は、今までの原子物理学を転倒させ非摂動原子物理の世界を開くし、電子の光電場中のエネルギーが静止質量を超えるので相対論的プラズマの世界を開く。高エネルギーの電子やX線・ $\gamma$ 線が強く高輝度で発生される。これらを通じ、陽電子発生や核物質励起といった反応も予期される。最近の実験などを通じ航跡場加速という機構により  $TeV/m$  といったとてつもない電場も射程内に入っている。一方磁場生成においては  $10^{10}$ – $10^{11} G$  の磁場が可能ではないかと考えられている。光の電磁場の強度が  $10^{18} W/cm^2$  に達する辺でその電磁場中で振動する電子が相対論的エネルギーに達し始めるので、強度  $10^{23} W/cm^2$  で電子のエネルギーは  $100 MeV$  を超える事になる。これは中間子の静止質量の程度（或いはクォーク質量の程度）である。宇宙論的熱史（プラズマ史）の言葉に直すと、レーザー物質照射が  $10^{18} W/cm^2$  の段階でビッグバン宇宙創成後約一秒の電子・プラズマの再結合期に当たると見え、 $10^{23} W/cm^2$  の照射ではニュートリノやクォークも出現しかねないビッグバン後約  $10^{-4}$  秒前後、数百  $MeV$  のプラズマに対応すると言ってみよう。こうした超高温・相対論的プラズマは、宇宙初期のみならず、ブラックホール近傍活動銀河等の物理、 $\gamma$ 線バースト等にも関連するであろう。一方、この高強度電磁場のもたらす光圧は、千ギガバール（GB）の程度にまで到し、これは現在において、地上で作り得る圧力の最大級である。こうした超高压を実験的にうまく制御するのは容易ではないが、新たに惑星内部、星内部といった条件に近づく手段になり得るであろう。

こうした以前は天文学的な物理条件なので地上では実現可能とされていなかった諸条件が短時間ではあるが地上の実験室で再現することが、 $T^3$  レーザーの創意ある応用によって可能になるであろ

う。上記のようないわば“粗暴”なやり方でパラメータを極限化して行く方法の他に、より洗練された方法等も考えられて行くであろう。例えば重原子を  $T^3$  レーザーで瞬間に多重イオン化させ、その瞬間の内殻電子・核相互作用を調べる事による量子電磁力学的研究。各天文学者・物理学者の創意ある研究を期待したい。

## 2. 実験天文学への入口

この稿では、私の貧困な頭でも考え方つく程度の例を一・二紹介して見よう。 $T^3$  レーザーのパルスを固体の表面に照射するという簡単な実験を考えよう。レーザーのパルスが従来のように 1 ピコ秒 ( $10^{-12} sec$ ) 以上だと、照射の結果電子がイオン化され更にその結果のプラズマが光と相互作用し加熱し、更にその結果電子が表面から吹き出しそれがイオンをも引きずり、プラズマが固体表面から噴出するという現象が起こる。結果、表面はクレータのように穴ぼこが出来る。一方、パルス長が 1 ピコ秒以下では、光と物質の相互作用がすっかり変わってしまい、私がより“きれいな”相互作用といっている風になる。即ち、パルスが短く強度が  $10^{14} W/cm^2$  程度を越えると、光は固体原子中の電子をイオン化するのに熱とか衝突といった二次的過程を経る事をしないで、直接、多重光量子イオン化過程と言われる、非線型光学過程で電子を原子から離脱させる。この場合電子は二次過程を経る前に光は既にいなくなっている為に、電子のエネルギーはせいぜい光子のエネルギー即ち 1 eV 位にしか過ぎない（それでも室温の数十倍である）。もう少し光の強度が強いと光は、電子を原子に閉じ込めているクーロン場に穴をあけ、それが為に電子がもれ出すという過程が起り始めるが、やはり電子エネルギーは数 eV の程度が普通である。一方、イオンの方は、光のパルスがフェムト秒のオーダーと短い為にこの時間では慣性のせいで動けない。従って静止したままでほぼ室温程度の初期と考えてよい。光子の急速な入射に伴ってイオン化した電

子とイオンは数 eV の比較的低温のプラズマを作り、プラズマは元の固体表面を“きれい”に保ったままである。一方高強度でかなり（或いは殆ど全て）の電子が光でイオン化するので、固体表面での電子プラズマ密度は  $10^{23}$  とか  $10^{24}/\text{cc}$  といった高密になっている。どの位の光子エネルギーが固体表面のプラズマに入るかは、固体の物性、光の諸元によって違い、諸々のシナリオが作りうる。例えば、数 eV よりも高温にする事も可能であろう。前節で述べたような超高光圧をうまく利用して、より高密にできるかどうか、未詳である。

こうして作られた比較的低温の高密度プラズマは色々奇妙な性質を持っていそうである。高密低温なので、強結合プラズマと呼ばれる。図 1 には、水素の相図を示す。仮に氷化した水素の固体に  $T^3$  レーザーを短時間照射したと考えると、電子温度のみが急に一定の温度（シナリオによる）にまで上昇するが、プラズマの密度はこの間一定である。1 ピコ秒位からプラズマは流体力学的に電子の圧力で膨張をはじめ、より低密、低温へと変動して

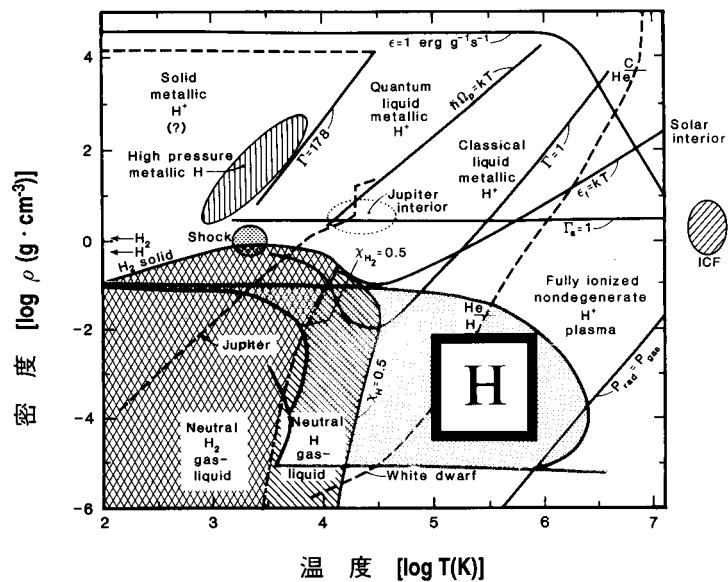


図 1 水素の相図（密度と温度）。H.van Horn (Science 誌) の図に手を加えた。左手中央の固体条件から出発したレーザー照射のシナリオが広い矢印で示してある。

行く。広い矢印でこの過程を示した。この相図にあるように、この一連の過程で通過する内には、木星の水素状態とか白色矮星の水素状態などもあり得そうである。以上は光圧によって何の圧縮もしない実験の場合であるが、もし利口な方法で圧縮も可能だとしたら、上記の広い矢印が経めぐる相図の領域とは違う領域も到達可能かも知れない。これには将来研究を要しよう。非常に高密になると（例えば質量密度  $10 \text{ g/cc}$  程度）、熱核融合とは違い密度核融合と言われる過程が起こると考えられる。この過程は超新星生成に必要と考えられているもので、その実験室的検証が出来うるだろうか？（一方、レーザー核融合での熱核融合過程が枠外の斜線 ICF と示してある）。

水素以外の物質、例えば炭素とか珪素への照射も天文学的意義が多いと考えられる。例えば炭素液化、その金属性の有無など惑星や星の内部の物理状態、ダイナモなどにも関連しよう。更に金属物質と  $T^3$  レーザーの相互作用も重要であろう。図 2 には鉄の相図を掲げる。鉄は進化を遂げた星の

内部や地球内部にふんだんにある物質で超新星や宇宙進化にとって重要な物質だ。再び単純に鉄の表面を  $T^3$  レーザーで短時照射した場合のシナリオを広い矢印で示してみた。もし多量の光子を注入し得、かなりの高温到達が出来たとすると、陽電子・電子対生成の領域まで踏み込めるかもしれない。こうした物性研究<sup>2)</sup> が天文研究の一翼になって行くだろうか？

こうした物質の状態診断は、時間が短いと言う事などで多難であろう。高速の X 線や可視光による診断技術の発展が必要となる。

比較的簡単なレーザーの物質照射のもう一例としては、金属などの固体クラスター照射（とか気

体・液体クラスター照射)がある。宇宙にはよく見えないが多量の微粒子があると考えられている。有名な炭素サッカーボールも最初は宇宙から発見されている。有名な川畠・久保理論にあらうように、ナノクラスターは電磁波に対してプラズマ異常吸収を起こす。一方、クラスターは一般に冷たく適当に荷電化している事が多いので(強結合した) プラズマとして存在する事も多い。更に、こうしたクラスターに強いレーザー場を加えると、異常に強いレーザー吸収と輝度の高いX線放射を行うことも最近わかつて来た<sup>3)</sup>。これらは、クラスターという一塊の物質がとりわけ強くレーザー場と相互作用する事を示している。これは、手ごろの塊が電子の集団相互作用を極端化したりする為であろうが、素過程はわかつてない。

最後に、ブラックホール近傍の高温プラズマの話を推測まじりに語って見よう。ブラックホールの事象水平線から3倍の $R_s$ (シュワルツシルド半径)以内は、軌道不安定性の為に一般には物質はこの空間に安定に存在しないと信じられているが、流体としてのプラズマには(電磁)流体的平衡解として一定の物質が存在しえる事が我々の研究からわかつて来ている<sup>4)</sup>。一可能性として、図3に示すような事象水平線と降着円盤ではさまれる空間に高温で薄いプラズマが広がっていてよい。このプラズマは非常に高温と考えられ、特に事象水平線 $R_s$ 近くでは1 MeVを越え、量子電磁力学(QED)の海をなしそこからは光子が絶えず陽電子と電子を放出したり逆が起こったりしている境界層プラズマがあるであらう。その物質生成のエネルギーは漸近的プラズマの事象線への下降とそれに伴う磁場粘性などによっていると考え

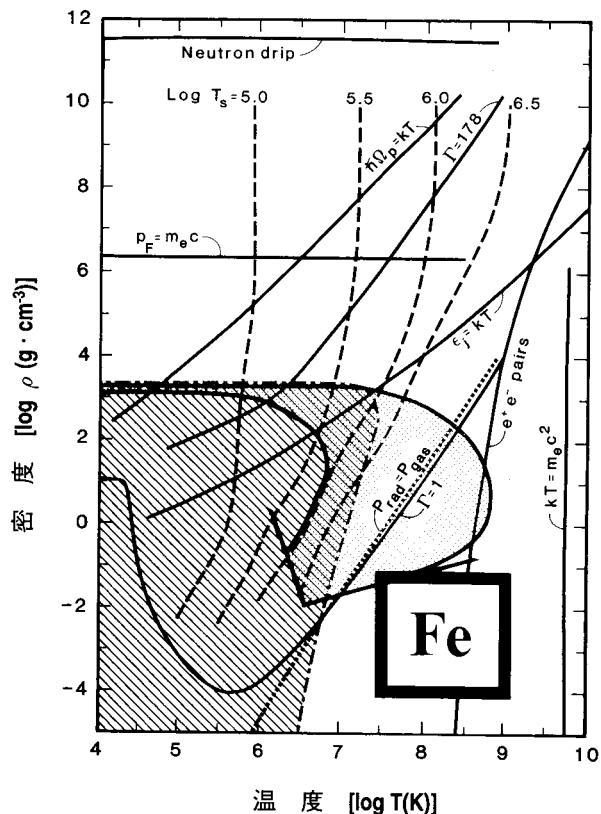


図2 鉄の相図(密度と温度)。やはりレーザー照射のシナリオが室温から出發して広い矢印で示す。やはりVan Horn(Science)の図に手を加えた。

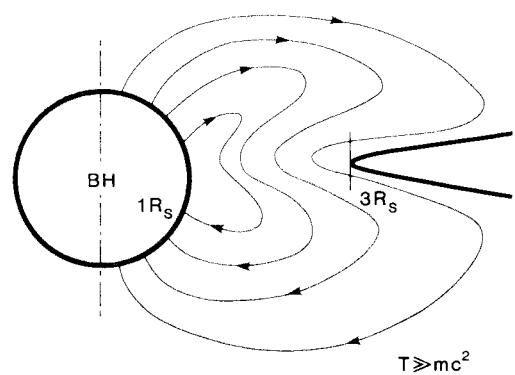


図3 ブラックホール近傍の超高温プラズマと量子電磁力学の海

られよう。このようなプラズマの物理は従来は理論のみの領域と考えられて來たが、 $T^3$ レーザーによる超高温プラズマはその一局面を切り口として示してくれるかもしれない。

### 3. 科学の横糸としての $T^3$ レーザー

20世紀末を迎えて、天文学にしてみても、物理学にしてみても、又生物学でさえも、その研究の方法と装置は日一日と大がかりで専門性の高いものへの道を歩んでいるように見える。より口径の大きな望遠鏡とか、よりエネルギーの高い加速器とかである。加速器の例では、一時代前までは各国で一台かよければ数台ずつあって実験をやっていたが、今では一つの型で世界でなくて二台あればいい方である。その内それも一台しか作れなくなり、ついに零になる時代が来るのだろうか？又、こうした装置は数少ないのみならず、極めて複雑・大型になって來ている為に、科学に興味はあるても素人ではとてもその全容はわからず、大学院生や駆出しの研究者にとっても、その極一部が見えるに過ぎない。こうして科学はいよいよ深くなつては行くものの、各研究者はお隣の領域が益々見えなくなつて行くという傾向になつて來ている。ここに紹介した $T^3$ レーザーの発展は、ひょっとすると、こうした最近の科学分野細分化傾向に抗して、諸分野をむしろ統合するように働くかもしれないという気がする。これは、 $T^3$ レーザーが小型・安価であると同時に極限を色々の形で引き出せる能力を持つために、 $T^3$ レーザーを丁度横糸のごとくに、X線を使う生物学者がいたり、物性学者がいたり、一方小型加速器を作り核や素粒子を研究する者がいたり、上述したような天文学的極限物性を研究する者がいたりし、その皆々がかなり容易に議論ができたりするような情況が生まれるのではないだろうか？例えば、超短レーザーパルスによって励起される航跡場と呼ばれる電場は極めて強いために、高エネルギー粒子加速に使えそうであるが、一方同時にその強い加速場はアイ

ンシュタインの「等価原理」に基づきそれは強重力場に対応するので、例えば $10^{18} \text{ W/cm}^2$ のレーザーパルスによる航跡場で太陽の百万倍のブラックホールに対応する“重力場”を作り得そうである。このような強い加速場＝重力場中で光子がどう赤方偏移して観測されるか等、いわば卓上ブラックホールの天体物理実験ができるのではないか？ $T^3$ レーザーを介して、天文学者と物理学者、化学者、物質科学者、…と色々対話が生まれそうなのを私は想像して一人悦に入っているのである。この潜在的可能性をもって私は、 $T^3$ レーザーを科学のインテグレーター（横糸）と呼びたい。色々の領域の科学者が従来の垣根を越えて $T^3$ レーザーの開く極限物性＝実験天文学の扉を開いてほしいと思う。幸い最近、原研関西研究所が $T^3$ レーザーを中心に研究開発を進める事になったので、諸賢がこれを利用して諸前線を広げていただきたいと願っている。

### 参考文献

- 1) 光量子の高度利用に関する懇談会「報告書」(科学技術庁原子力局, 平成8年).
- 2) S. Ichimaru, 1993, Rev. Mod. Phys. 65, 255
- 3) T. Donnelly, et al., 1996, Phys. Rev. Lett. 76, 2472
- 4) G. Tarkenton and T. Tajima, to be published.

### A Challenge of “Experimental Astrophysics” by $T^3$ Lasers

Toshiki TAJIMA

*Physics Dept., University of Texas at Austin  
and JAERI, ASRC*

At the advent of table-top terawatt ( $T^3$ ) lasers in 1990's, it has become possible to create on Earth astronomical conditions that have been thought not possible to terrestrially realize. We discuss examples of emerging possibilities such as ultrahigh pressure matter in the interior of a white dwarf and plasmas in the early Universe or in the neighborhood of a black-hole.